

[報告]

街頭献血における専任推進担当者配置による
一稼働献血者数の向上

群馬県赤十字血液センター

青木康浩, 高橋義幸, 高橋健太, 町田有希, 須田 聖, 大竹宏和,
渡辺 進, 都丸冷子, 町田孝一, 庄山 隆, 林 泰秀Improvement of the number of blood donors at street blood
donation, assigned a staff of donation promotion section*Gunma Red Cross Blood Center*Yasuhiro Aoki, Yoshiyuki Takahashi, Kenta Takahashi, Yuki Machida, Kiyoshi Suda,
Hirokazu Otake, Susumu Watanabe, Reiko Tomaru, Koichi Machida,
Takashi Shoyama and Yasuhide Hayashi

抄 録

群馬県の移動採血において街頭献血は全稼働の約4分の1を占めている。群馬県では企業献血や地域献血での献血者数が年々減少するなか、大型商業施設を中心とした街頭献血への配車台数を増加することで月間採血計画の補填をしてきた。しかし、各推進担当者は街頭献血に対して渉外活動の意識が低く、献血者数は当日の商業施設来場者数や天候等に左右される状況にあり、計画数の安定的な確保は困難であった。そこで、平成28年度より街頭献血の推進担当者を専任化し渉外活動を強化した。専任化に伴い、先方担当者への訪問回数の増加、新規協力団体の開拓、部門間連携等の強化を実施した結果、街頭献血の1稼働採血平均は平成27年度では39.4名であったところ平成28年度は46.5名と前年度より7.1名増加した。

Key words: street blood donation, the number of blood donors per one day,
full-time staff

【はじめに】

群馬県の移動採血において、街頭献血の配車割合は平成27年度では25.4%と全稼働の約4分の1を占めており、当血液センターにおける献血者確保の重要な役割を担っている。しかしながら、街頭献血の現状は年々献血者数が減少する企業献血や地域献血の代わりに、平日および土日に街頭献血会場への配車を増やしてきた。それは、月間

採血計画を成立させる補填のための配車であった。その結果、平成17年度には全稼働の11.6%であった街頭献血は平成27年度には25.4%まで増加した(表1)。一方、街頭献血に対する各推進担当者の渉外活動への意識は低く、献血者数は献血実施当日の商業施設来場者数や天候に左右され、計画数の安定的な確保は困難な状況にあり、当血液センターにとって街頭献血は稼働効率を低

表 1 群馬県の街頭献血割合の推移

年度	H 17	H 18	H 19	H 20	H 21	H 22	H 23	H 24	H 25	H 26	H 27
移動採血総稼働数(稼働)	902	913	921	948	937	943	923	1,012	996	995	973
街頭献血総稼働数(稼働)	104.5	112	140	159	224	233.5	211.5	298.5	280.5	272	247
街頭献血割合(%)	11.6	12.3	15.2	16.8	23.9	24.8	22.9	29.5	28.2	27.3	25.4

下させる一因であった。

当血液センターの推進業務は群馬県の市町村を分割し、企業、地域、学域、街頭のすべてを各推進担当者が担当していた。移動採血の半数が2カ所、3カ所移動であるため業務の多忙につき、主催団体のない街頭献血の渉外は献血受入れの打診程度であった。街頭献血を一から改善するにあたり、課題の発見と解決を迅速かつ円滑に行うには推進担当者を専任化しエキスパートを育成することが最善であると判断し、平成28年度より街頭献血専任推進担当者を配置した。

【方 法】

街頭献血の解釈は各地域センターによって異なるが、当血液センターでは商業施設やイベント会場における主催献血協力団体を伴わない、一般献血者を中心とした献血会場を街頭献血と定義している。ただし、市町村が窓口となる地域献血を除くものとする。

従来の街頭献血の渉外方法は先方担当者に電話およびメールでの日程確認をした上で依頼文、献血実施広報用ポスターを持参するのみであった。街頭献血専任推進担当者設置後は、面会での日程調整、献血実施現場への同行、献血に付随したイベントの提案と実施などを通して先方担当者への訪問回数を増やした。県内の大規模な商業施設については毎月献血の受入を依頼しており、訪問回数は年間を通して数十回となる現場もあった。訪問回数の増加に伴い先方担当者との人間関係が少しずつ形成される中で、商業施設来場客の多いイベント情報や前年度同時期の商業施設来場者数など有益な情報の聴取が可能となり、配車計画の作成に新たな要素を取り入れることができた。

上記方法で先方担当者と協力関係の構築を進めるとともに、以下の5つの取り組みを行った。

1. 協力団体の開拓および既存協力団体への動員依頼

献血実施に伴う協力団体活用の有効性はこれまでも多数の報告があり、安定的な献血者確保には不可欠な要素である^{1)~3)}。当血液センターの街頭献血の協力団体は年間を通して少なく、協力依頼も消極的であった。そこでまず、群馬県内の献血協力未実施のライオンズクラブ、青年会議所を中心に会長および理事長と面会し、献血への理解と献血者の動員協力を依頼して回った。また、薬剤師会や臨床検査技師会など、県内に会員組織のネットワークを広く構築している団体については献血協力強化月間を設定し、各街頭献血会場への協力度体制を整備した。その結果、新規協力団体の獲得は平成27年度には1団体であったが、平成28年度では13団体に増加した。

また、既存協力団体については例会および理事会への出席依頼を行い、今までの広報主体の協力から献血者動員主体の協力への変更を依頼した。依頼をする中で、年齢や服薬によって会員自身が献血できないという声が多く上がった。そこで会員1名につき1名、会員自身もしくは家族や従業員の動員を依頼し動員協力を促した。

2. 街頭献血における配車計画の一元化

街頭献血の配車計画はすべて街頭献血専任推進担当者が計画し、過去の採血実績をもとに1稼働採血効率の良い会場を増回、悪い会場を縮小および廃止した。今まで献血の実施回数が増えるほど、各献血実施の協力者は減少すると根拠なく考えられていたが、特定の大型ショッピングモールについては実施回数を増回しても1稼働平均採血数を維持することができた。一方で、郊外のホームセンターやショッピングセンターについては、当血液センターからのメールやダイレクトメール

(DM) に応諾して来場する固定の献血者が多いことから、企業献血と同様の考えで各会場の年間実施回数の上限を3回までと設定し、年間採血総量の期間を考慮した上で実施日の設定を行った。その結果、各会場の1稼働採血率が増加し、平日の街頭献血を廃止することができた。また、200mL献血者の受入をしていた会場については積極的に400mL献血限定会場へと変更した。

3. 街頭献血会場の受付場所、献血者受入れ環境等の改善

献血バスの設置場所や、献血受付の場所、レイアウトが街頭献血において献血協力のきっかけに大きく影響していることは過去にも報告がされている^{4)~6)}。そこで、各商業施設の献血担当者に来場客の往来の多い場所に受付場所の変更を相談した。変更が難しい場合には、モール内の別入口に簡易的な受付場所を増設し献血者の受け入れを強化した(図1)。

並行して、献血係と共に街頭献血における献血者受入れ改善のための作業部会を設置し、従来の献血者受入れを見直した。改善にあたっては、関東甲信越ブロック血液センター内の各地域センターへ献血者の受入方法を聴取し各地域センターの利点を取り入れるとともに、研修で訪問した福岡県赤十字血液センターの受入方法を参照した。事

前受付については対面式からバインダーに変更した。献血受付確認票についてもサイズをA4に変更し、説明を最小限にできるよう様式を変更した。献血受付の混雑は視覚的に献血協力を敬遠させると考え、各会場必ず受付端末を2台持参し、献血カード持参者については優先して受付を行うことで渋滞のないように配慮した(図2)。

4. 効果的なキャンペーンの実施

街頭献血の献血者処遇品を選定するにあたっては、キャンペーンとして成立することができるかを選定基準とした。通常、献血者処遇品は献血者への周知が少なく、街頭献血協力時のきっかけとしては項目としてすら挙がらないほどである⁵⁾。処遇品として選定したものは季節に合わせた物品、全国的に認知度の高い県内生産食品、献血バスのミニカーなどであった。それらはすべてキャンペーンとしてDMやメールクラブを活用して広報展開した。

また、学生ボランティアとの連携を強化し、ハロウィンやバレンタインの時期に合わせて新規キャンペーンを実施した。学生と頻繁に面会するようになると、学生からもさまざまな提案を受けるようになった。とくに全国学生クリスマス献血キャンペーンについては、千葉県赤十字血液センターの実施報告を受けて、ステージイベントを中心



モール中央通路に受付場所を変更



店内に2カ所目の受付場所を設置

図1 献血受付場所の変更と増設

表2 平成27年度と平成28年度の街頭献血実績比較

	平成27年度	平成28年度	増減数
1 稼働採血平均(名)	39.4	46.5	7.1
総稼働数(稼働)	247	227	△20
400mL 献血率(%)	98.4	99.7	1.3

表3 平成27年度と平成28年度の移動採血実績比較

事業所等献血実施比較(街頭, オープンを除く)

	平成27年度	平成28年度	増減数
1 稼働採血平均(名)	38.0	40.7	2.7
総稼働数(稼働)	717	652	△65
400mL 献血率(%)	86.9	89.8	2.9

群馬県移動採血全体(オープンを除く)

	平成27年度	平成28年度	増減数
1 稼働採血平均(名)	38.4	42.2	3.8
総稼働数(稼働)	964	879	△85
400mL 献血率(%)	89.9	92.6	2.7

たちにとって、街頭献血とは計画数が取れなくて当然、取ればラッキーという価値観であった。街頭献血専任推進担当者の配置は商業施設の渉外活動の改善はもちろん、センター内での部門間連携の活性化をもたらしたと思われる。今まで、登録係との打ち合わせは街頭献血のみならず、渉外活動全般において皆無であった。ハガキや複数回献血クラブ会員へのメールは、あくまでも後方支援としての扱いであり、各推進担当者は登録係の業務に関心を持つことはなかった。しかし、団体を有しない街頭献血においては、いかに献血実施情報を応諾の高い献血者に発信するか、そのためのデザインはどのようなものが最適か、メールの文面はどのようなものが良いのか、さまざまな試行錯誤を繰り返した。今では1会場の献血者の過半数がハガキ、メールの応諾者という会場すら存在するようになった。また、献血係と街頭献血に

おける推進担当者との連携も希薄であったが、献血者受入れ改善の作業部会を経て実績が向上するにつれて意識の変化が見られた。献血係は今まで40名採血ができれば満足していたが、今では40名では「悔しい」と感じるようになったようである。その他にも広報担当者へプレスリリースや学生担当者へのキャンペーンの相談など、街頭献血の改善として取り組んだことが結果として部門間の連携を活性化させた。

近年の共働き世帯の増加などで地域献血が衰退するなか、街頭献血は市民が献血に参加する主要会場となってきた。街頭献血が豊かになれば市民の献血意識を向上させ、企業献血をはじめとした他の献血会場に還元されると思われる。今後もセンター内の各部門、先方担当者、献血協力団体と連携を取りながら街頭献血の向上に取り組む予定である。

文 献

- 1) 山火裕ほか：青森センターにおけるライオンズクラブへの取り組み 血液事業 39：445, 2016
- 2) 廣江善男ほか：ライオンズクラブと協同した献血

推進～眠れる獅子が動き始めた～ 血液事業 38：441, 2015

- 3) 清山幸彦ほか：ロータリークラブによる「お誘い献血キャンペーン」について 血液事業 38：492,

2015

- 4) 櫻井聡ほか：ショッピングモール常設専用駐車場を用いた「献血ステーション」の活用～1会場年間献血者1万人の達成～ 血液事業 38：681-685, 2015
- 5) 青木利昭ほか：街頭献血時のアンケート調査の結果報告～効果的な広報確立を目指して～ 血液事業 36：407, 2013
- 6) 佐藤直ほか：街頭献血の活用について～型別採血の一方法について～ 血液事業 24：274, 2001
- 7) 中嶋智行ほか：複数回献血クラブ会員への献血要請メール配信効果の検討 血液事業 36：430, 2013
- 8) 福田敏考ほか：青森センターにおける献血者確保への取り組み～複数回献血クラブの応諾率について～ 血液事業 39：446, 2016